The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	実用英語検定協会からの受託研究について
Author(s)	岡田, 新
Citation	大阪大学英米研究. 2010, 34, p. 49-49
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99341
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

実用英語検定協会からの受託研究について

平成21年度、大阪大学言語文化研究科言語社会専攻の英語部会では、実用英語検定協会から「大学英語教育におけるCEFR（ヨーロッパ共通言語参照枠）の活用に関する研究」を受託した。平成21年度は、大阪大学外国語学部英語専攻の学科目に属する教員を中心にして（1）新入生向けのEnglish Forum を開催、(2) 外国語学部の学生を対象に、CEFRに準拠した検定試験（BULATS）を実施、(3) 工学部生・工学研究科大学院生を主たる対象として、英語によるプレゼンテーションスキル養成講座を開講、さらに（4）上記の実践をもとに、CEFRの活用に関する小規模な部内の研究会を12月17日に、箕面キャンパスで開催した。

周知のように、CEFRはEUにおける言語教育の標準的なフレイムワークとなっており、大阪大学外国語学部でも、言語教育の到達度評価を策定する際、CEFRを重要な資料として参考にしている。だが英語教育については、TOEIC、TOEFL、実用英語検定などが一般的に標準的なベンチマークとして用いられており、大阪大学外国語学部でも、英語の到達度評価の尺度としては、上記のいわゆる三大検定試験を採用してきている。こうした既存のベンチマークとCEFRをどのように関連づけ、活用するかは、これからの課題である。

以下に掲載する論稿は、こうした課題に答えるための基礎的な研究、実践の一貫であり、英語専攻の学生を対象としたセルフ・アセスメント、TOEIC、BULATSの記録を基に各指標の相関を論じた研究と、工学部・工学研究科の大学院生を対象としたプレゼンテーションスキル養成講座の教育実践の報告である。外国語学部生全体を対象としたBULATSのデータについては、21年度末に、同じ対象についてのTOEICのデータがそろう予定であり、それを待って、両者の関連について立ちいった分析を試みたいと考えている。

（事務担当　岡田　新）